



「日本の気候景観 一風と樹 風と集落」

青山高義・小川 肇・
岡 秀一・梅本 亨 編
古今書院, 2000年1月, 181頁,
定価2800円(本体価格)

「気候景観」という言葉になじみがない天気読者も多いだろう。それもそのはず、故矢澤大二博士が「気候景観」(古今書院)を出版したのは1953年。以後この語を冠した書物を評者は知らない。もっとも矢澤氏を知らない人も多いかもしれない。氏は東京都立大学地理学教室気候学研究室の設立者で、他の著書には欧米における当時の最新の研究を満載した「気候学」(1956, 地人書館)、晩年の大著「気候地域論考」(1989, 古今書院)などがある。本書はこんな矢澤氏の薫陶を受けた編者らが中心となって執筆された。先生の傘寿をお祝いする会の3次会でできた「気候景観研究会」における6年以上におよぶ検討に、4回の現地巡検を重ねて書かれたというから、大変に手のかかった本である。

本書は以下の4章からなる。

第1章 気候景観研究とは

第2章 山の偏形樹をめぐって

第3章 平野と海岸でみられる偏形樹・防風林・屋敷林

第4章 気候景観の調べ方

第1章は導入だが力が込められている。気候景観には環境評価と気候指標の2つの意義があることが述べられ、さまざまなスケールにおける気候景観の事例紹介や、中心テーマである偏形樹や屋敷林についての説明がされる。また日本の気候特性も概観される。しかし大スケールでの気候景観については、ケッペンなどの古典気候学者が植生を気候分類の拠り所にしたことが触れられるだけで、本書では全く扱われない。酸性雨や酸性霧による立ち枯れなども、評者は立派な気候景観と思うが、本書に言及はない。主要な記述を「風」に限る理由や、「日本の」という限定が必要な理由の説明もない。これらによって、本書の視野がやや狭く限定された感がある。

第2章と第3章は本書の中核をなす、具体的地域での事例研究である。対象は北は利尻島から南は琉球列島まで全国にわたり、編者のほか現地に詳しい7名に

よる分担執筆である。豊富な図版と大部分著者ら自身の手による写真が、臨場感を高めているが、一部の写真(たとえば大雪山や八丈島の写真2など)はカラーだと一層良かった。偏形樹の向きは、従来単に分布上の対応から、簡単に卓越風の指標とされることが多かった。編者らはこれに対し、その成因を実証的に解明しようとして多大な努力をしている。調査が困難をきわめる山岳部での気候について、移動観測実施日の気象状況を総観気候学的に位置づけて把握していく手法や、樹木の四方に塗装した金属板を取り付けてその塗膜の剝離状況をみる手法などは、編者らが独自にみだしたユニークな研究方法で、貴重な成果である。

しかし結果の一般性は今後の課題とされることが多く、「事は容易でない(64頁)」ことを知らされる。表紙にも印刷された富士山をとりまく偏形樹の方向には、改めて地形が風に及ぼす影響の大きさを教えられる。なお偏形樹の向きについて、本書では「西～北西風を反映した偏形(奥秩父, 62頁)」、「南東方向の偏形(富士山, 67頁)」などの用語がある。両者は同じ向きを示すにもかかわらず、表現上180度違っており混乱を招く。記述を統一してほしかった。第2章で石鎚山の植生の高度帯状性が九州の山地に比べて明瞭なのは冬の季節風による降水があるため(74頁)、とする理由や、第3章で斜里平野の海岸部と内陸部での偏形樹の向きが違う(87頁)理由は、評者にはよくわからなかった。輪島測候所における風のデータは能登半島での地域代表性が低い(108頁)、としながら地図上に測候所の位置がないのは不親切である。

最後の第4章には研究方法が詳しく述べられ、これから研究を志す人には格好のガイドとなろう。ただ第2章で多用されている山岳気象台の資料については、古いもので知らない人も多いと思われるので、第4章でも紹介してほしかった。

読み進むうちに、偏形樹には、樹種による違いの問題、原因となる風が卓越する季節の問題、そもそも卓越風を示すか否かの問題、などがあることが事例ごとにわかってくる。しかし、それらを包括する大きな問題点とその解決法については、今一つ明快ではない。また山地と低地の現象、すなわち第2章と第3章の内容が相互に関連するものなのかについても明らかではない。これらの読後の不満は、第2章や第3章が事例の提示で終わり、適切な「まとめ」がないことによるものと思われる。もっともそれは読者の仕事なのかもしれないが、

このように若干の不満感が残ったものの、日本における風による気候景観に関して、多くの事例と問題点を提示した本書の意義は大きい。これらの事例から、読者は大気現象の一種の可視化でもある気候景観の読み解き方を学ぶことができる。そのような眼をもった人々により、環境評価がなされるようになれば、人類の環境認識はより深まっていくであろう。地表環境に対して大気がはたす役割に興味をもつ人や、山好きな人にとくに勧めたい。

(東京大学大学院理学系研究科 松本 淳)

[編集委員会より:「本だな」欄でここに紹介されている本は、今年の8月号の同欄にも別の著者により紹介されています。「本だな」には、「編集委員会から原稿を依頼して掲載」および「会員からの自由投稿も受け付け」の2つの種類がありますことから、今回、同じ本の2回目の紹介の掲載となりました。]



日本沙漠学会2000年度秋季公開シンポジウム 「乾燥地域の環境変動—人類誕生から現代まで—」

1. 主催：日本沙漠学会
2. 日時：2000年12月2日(土)13:00~17:00
3. 場所：名古屋大学豊田講堂第一会議室
4. 趣旨：

人類は洪積世後期、アフリカに出現した。その後の移動・拡散を経て、紀元前3500-3000年、ティグリス・ユーフラテス川、ナイル川、インダス川、黄河の流域で4大文明が開花した。現在、これらの地域はいずれも乾燥地域となっている。本シンポジウムでは、乾燥地域の環境変動を、人類誕生から現代までのタイムスケールで人類史・文明史・自然科学の視点から議論する。

5. プログラム：

13:00~13:05 開会の辞
嶋田義仁名古屋大学教授

13:05~15:30 講演

- 1)「黄砂から見た乾燥地域の環境変動」：
甲斐憲次氏(名古屋大・人間情報)
- 2)「沙漠から見た人類史」：
赤澤 威氏(国際日本文化研究センター)

3)「沙漠から見た文明史」：

- 嶋田義仁氏(名古屋大・文学)
15:30~16:40 総合討論
導入「モンゴル人から見た砂漠化」：
楊 海英氏(静岡大・人文)
16:40~16:45 閉会の挨拶
吉野正敏筑波大学名誉教授
17:00~19:00 懇親会(名古屋大学シンポジオン
「ユニバーサルクラブ」)

6. 参加費：無料。ただし、資料代・懇親会費は当日受付にてお支払い下さい。

7. 申込み先：

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院人間情報学研究所
甲斐憲次
FAX: 052-789-4257
email: kai@info.human.nagoya-u.ac.jp
(電子メールのタイトルは desert)